HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道漁村における漁協女性部の活動の役割 ： 時代的社会背景との関連と活動者の意識構造に基づいた分析［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	小泉, 聡美
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(水産科学)
Dissertation Number	甲第11323号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55377
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Satomi_Koizumi_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（水産科学）　　氏名：小泉　聡美

北海道漁村における漁協女性部の活動の役割

－時代的社会背景との関連と活動者の意識構造に基づいた分析－

本研究で対象とした北海道では全国で初めて漁協女性部（以下，女性部）が結成され，漁業協同組合（以下，漁協）の信用事業確立のための貯金運動を中心に生活改善活動を先駆的に展開してきた。近年の女性部では，部員の高齢化と減少という問題を抱えながら，漁協・漁村の振興事業への協力的活動や植樹などの社会活動によって漁協と地域に多大な貢献を果たしている。このような女性部活動はボランティア的な性格が基本であり，活動は活動者の意志や喜びなどの内面的要素に支持される部分が大きいため，活動を理解するには活動者の意識構造を明らかにしておく事が肝要である。一方，これまで活動と活動者の意識との対応関係を定量的に示しうる研究は行われておらず，漁村においての女性部活動の役割や問題・課題，支援の必要性は明らかにされてこなかった。

本研究では北海道漁協女性部の活動が社会的背景と活動者の心理的側面に深く関わっていることに着目し，女性部の起源に遡った根源的な活動の構造と今日的な活動の構造を対比的に分析することによって，設立以来の活動に通底する共通性と時代的な特殊性を解明し，活動が漁民の生活と漁村の形成に果たしてきた役割および今後の活動展開の方向を明確にすることによって，漁村の地域づくりに寄与することを目的とした。

本論は序章において研究の背景と目的を述べ，以下の 4 章で構成した。

第 1 章では，1950 年代の社会的背景をまとめた上で，資料分析によって，女性部活動の起点となる婦人部設立期の活動の構造と特徴を明らかにした。1 節では国内情勢と漁村の状況について，女性政策と女性運動の視点から女性史と漁業史を整理し，2 節では漁村事情を背景とした婦人部の設立の過程について，「道漁婦連研修会の記録」ほか 34 冊の資料の記述を年代に沿って整理した。まず 3 節では資料中に分散する部員の発言記録を整理して活動内容と活動者の心情に関連する記述を抽出し，活動を規定するための指標要素を 10 項目の活動と 21 項目の心理的要素に集約した。次に，定性的な記述で表現される活動項目と心理要素からなるバート表を作成して対応分析を行い，クラスター分析によって活動の構造を 2 軸の空間上に表現した。4 節では分析結果から，婦人部の設立が漁協を中心とした地域全体の協力体制で行われたことと，活動は実生活に密着した便益と満足感などの内的効果によって存立していることを示した。これらの結果

から，女性部活動は「動機」「満足感」「不満感」「活動効果」の 4 つの潜在的指標によって構成されることが明らかになった。

第 2 章では，全道の女性部を対象としたアンケート調査から，今日の女性部活動の特徴を明らかにした。1 節では，1975 年の国際婦人年世界会議以降の女性施策を社会的背景として，都市，農村，漁村の地域特性と女性の社会的活動の枠組みをまとめた。2 節では，女性部活動の効果について，1 章の指標をもとに設問を作成し，全道 116 ヶ所の女性部長と任意に抽出した 8 地区の女性部員を対象にアンケート調査を行った。回収数は部長 66 部，部員 62 部であった。設問に対する 4 段階の回答を肯定と否定の 2 段階の順序尺度にまとめ，ノンパラメトリック回帰分析である Passing-Bablok 法を用いて分析した結果，活動による効果に対しては部長の方が部員よりも肯定感が強く，両者の認識に差があることが明らかとなった。3 節と 4 節では部を統括し活動を主導する立場にある，全道 116 部の部長を対象母集団として，全道に共通的な「植樹と清掃」「料理教室」「水産加工品の製造販売」の 3 つの活動について，動機，満足感，不満感についてのアンケート調査を行った。回答数は 67 部であった。回答結果の分析においては，特異的に反応した回答項目を抽出するために，平均値付近の項目に対して有意な反応を知るための定量的指標として，平均からの偏差得点を標準偏差で標準化した z 得点を用い，回答数の 31.7%が含まれる $1.0<|z|$ の項目に着目して，4 節では，活動の促進要因が「地域住民との共同」「地域貢献」「人的交流」であり，抑制要因が「地域住民の無理解」にあることを示すことができた。

第 3 章では，今日の女性部の組織的特徴と活動の実施状況に基づく活動の継続要因を分析した。1 節では，全道の女性部長を対象に女性部の現状についてアンケート調査を行い，女性部の組織的特徴と，「イベント活動」「料理教室」「起業活動」の実施状況と課題を明らかにした。回答数は 88 部であったが，設問の項目数が多かったことと設問ごとのデータ数が少なかったことにより，クロス集計の精度を上げることができなかったため，単純集計による全体傾向の分析にとどめた。その結果，北海道の女性部では「下部組織」という意識が強く，「部員の親睦」と「漁協のための活動」が最も重要とされていることが明らかとなった。料理教室は漁業者からの情報発信の場としても機能しており，活動者にとっては満足度と期待が大きい活動となっていた。2 節では，起業活動を継続中の 2 女性部と活動を中止した 2 女性部，製品の発売に至らなかった 1 女性部を対象に，活動の経緯と必要条件の充足度，中止の原因についてヒアリング調査を実施し，起業活動の継続要因が施設と活動メンバーの確保，漁協の支援と承認であることを明らかにした。3 節では分析結果から，活動には共通的に「やりがい」などの満足感があるが，「できればやりたくない」と考える活動者の存在が明らかとなり，外部的支援の必要性を示すことができた。

第 4 章では，以上の結果に基づいて，女性部活動が果たす役割と今後の活動展開の方向を示した。1 節では，1 章で明らかにした婦人部の設立経緯から，婦人部の性格が組

合員の家族会と地域女性の共同体という両面性を有していることを明示することができた。2 節では，1 章と 2 章で分析した活動構造の比較から，時代に共通的な特徴が，「利他的動機と効果」「視野拡大の効果」「共同」「女性の地位向上が困難」であることを解明することができた。3 節では，1 章で抽出した「女性の地位」に関する要素と 2 章で明らかになった「女性の地位向上」の否定感から，漁村においては女性の地位向上の実現と意識が低位であることを示すことができた。4 節では，3 章で分析した活動の継続要因から，施設利用への漁協の支援の必要性が明らかとなったが，今後の詳細な追跡調査を要することがわかった。5 節では，女性部活動が漁村生活における外形的成果だけでなく活動者の内面的効果を持つことが，漁村における女性部の存在意義となっていることを，漁村の持続性とともに提示することができた。

以上のように，本研究では，北海道漁村における女性部の組織と活動の特徴および役割を，時代的社会背景との関連と活動に対する女性の意識構造から捉えることによって，活動展開の方向を明示することができた。更に，今後の高齢化漁村社会においては，女性部を「女性同士の交流，つながりの場」として活用することが地域の重要な役割であり，漁村に居住する女性に「やりがいのある活動」への支援を行うことは，漁村の維持と存続に資するための社会的機能であることを表すことができた。